

セラムック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No. 28

編集 1994.1.30
発行 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 山田 隆 三
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町中部乙3100-1
電話 0955-43-3681
印刷所 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大
里乙3617-5



えがらつやなぎもんむこうづけ
絵唐津柳文向付

館蔵資料

肥前・唐津焼・小峠窯

16世紀末～17世紀前半

口径7.2cm 高さ9.5cm 底径4.1cm

口縁をわずかに外反りにし筒形につくる。胴部の上と下に段をつけ、鉄絵で柳文を軽妙なタッチで描く。いかにも唐津らしい趣のある向付である。茶懷石において平皿風のを平向と称しているのに対して、このような筒形の向付は深向、のぞきなどと呼ばれている。まさにのぞき込むまで中が見えず、かえって妙味があるとして喜ばれる。

世界・焔の博覧会プレイベント

「世界の染付」展

平成5年9月24日から10月31日まで、第1・第2・第3展示室において世界の染付展が開催されました。

染付は呉須(コバルト)で文様を描き、透明釉を施して焼成した陶磁器のことで、中国では青花と呼ばれ14世紀、元の時代に本格的に始まった。朝鮮、ベトナムでは15世紀、日本では肥前において17世紀に生産が開始したとされる。ヨーロッパにおいてはドイツのマイセンで18世紀初頭に染付が始まっている。また磁器ではないがイスラムやオランダのデルフトでも多くの染付が作られた。本展ではこうした世界各国の染付の作品を一堂に展示し、それぞれの歴史的展開と特質を比較して明らかにするものです。

出品作品の内訳は、中国51点、朝鮮12点、日本156点(伊万里141点、鍋島15点)、ベトナム11点、イラン6点、デルフト8点、マイセン5点である。中国は元染付の1点を除き、中国・上海博物館から出品されたもので、数多い所蔵品の中から各時代の様式がよく現れた作品、制作年代の明確な作品を中心に選定された。朝鮮、日本、ベトナム、イラン、デルフト、マイセンの作品は、日本国内の美術館、博物館および個人所蔵者からの出品である。これら各国の染付を選定するにあたって、検討を余儀なくされた点があった。それは染付を高火度焼成された釉裏青の磁器だけとするならば、デルフトやイスラムはこれに入らないということであった。しかし、本展では陶胎にコバルト顔料で彩色された作品も、広い意味の染付として紹介し、狭義の染付と区別するため「白地藍彩」の呼称を用いることとした。

本展の主旨の一つとして、中国と伊万里における染付の展開を軸として、各国の染付との影響関係を示唆することがあったが、中国から伊万里、中国から朝鮮やベトナム、中国からイランへの影響、また伊万里からデルフトやマイセンへの影響など、大きな流れをある程度表すことができたと考える。なかでも中国・景德鎮の影響を色濃く受けた伊万里がしだいに独自の様式を確立し、変遷を重ねていく過程はかなり明確に示

せたと思う。

しかし、今回の展覧会で果たせなかったテーマも多い。それぞれの国における染付の起源の問題。用いられた呉須の分析と時代による変化。文様における染付と色絵の関係。各国の染付と色絵の受容の相違点。古染付や祥瑞と伊万里との比較。日本における陶胎染付の位置付けなどである。これらの点は一部、紹介しているが、展示構成のなかに直接組み込んで展示することはできなかった。今後の課題といえよう。

9月24日の開会式には来賓として上海博物館から顧祥虞氏(副館長)、屈曉丹氏(広報教育部主任助理)また展示指導のため来られた陸明華氏(陶磁器研究部主任助理)、張東氏(陶磁器研究部主任助理館員)をはじめ、出品者や招待者の方々が多数出席し盛大に行われました。

また会期中の10月17日(日)には、上海や景德鎮の事情にも詳しい写真家の大塚清吾氏による「レンズのなかのやきもの—中国と日本—」と題された講演会が行われ、聴講者はスライドを交えた興味深い話に熱心に耳を傾けていました。



開会式のテープカット



講演会風景

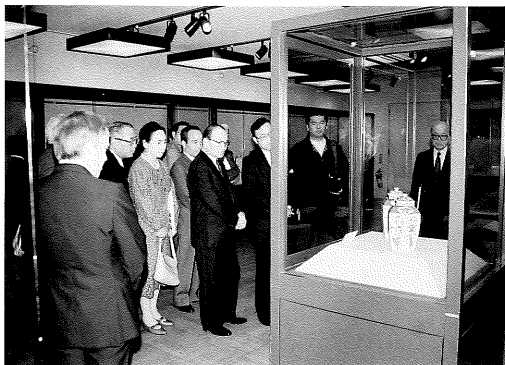
展覧会報告

ヨーロッパに開花した色絵磁器 柿右衛門展

朝日新聞社、九州陶磁文化館の主催で平成5年4月3日から4月25日まで、第1・第2・第3展示室において開催されました。江戸時代、数多く輸出され、ヨーロッパの王侯・貴族の心をとらえ、各地の宮殿に飾られた柿右衛門様式の色絵磁器を取り上げ、ドイツの国立カッセル美術館、ファザナリ城博物館、イギリスの大英博物館などからの里帰り作品（45点）をはじめ、日本国内に所蔵されている優品を併せて118件、165点を展示し、柿右衛門様式のもつ魅力とその歴史的役割を探るものです。4月3日に開会式が行われ、ドイツ・ヘッセン方伯・モリッツ氏、大英博物館・スミス氏・14代酒井田柿右衛門氏、佐賀県知事などが出席しました。会期中12,204名の入館者を数え、皿や壺、鉢をはじめ、獅子や虎、象などの動物をかたどった置物や、婦人人形といった華麗で優美な柿右衛門様式の色絵磁器に見入っていました。



開会式のテープカット



展示風景

中国古陶磁への誘い展

—景德鎮官窯磁器から有田磁器へ—

平成5年4月29日から5月9日まで、第3展示室において有田町、有田町教育委員会の主催により、「中国古陶磁への誘い」展が開催されました。

中国最大の磁器生産地・景德鎮は、その長い歴史の中でも15世紀の官窯で優れた製品が多数作られたことが知られている。その官窯跡が1979年、工事中に偶然発見され、そこから出土した陶磁片は景德鎮陶瓷考古研究所の手によって復元され、保管されている。

本展では15世紀の景德鎮官窯磁器出土品を中心に、それ以前の宋、元代の出土品や有田磁器が手本とした17世紀の景德鎮民窯の陶磁片や窯道具を含め、95件、138点が展示された。

この展覧会は、平成8年に有田地区で開催される世界・森の博覧会のプレイベントとして行われたもので会期中の5月6日には景德鎮陶瓷考古研究所長・劉新園氏による「景德鎮磁器の流れについて」と題された講演会も行われ、多数の入館者があり高い関心が示されました。



展示風景

柴田コレクション展(Ⅲ)

柴田コレクション展(Ⅲ)は平成5年5月14日から6月20日まで、第1・第2・第3展示室において開催されました。柴田夫妻コレクションは17世紀前半から18世紀後半にかけての多種多様な有田磁器からなり、

これまでに柴田コレクション展（Ⅰ）、（Ⅱ）として一般に公開し、好評を博しました。今回の柴田コレクション展（Ⅲ）もこの範囲からはずれるものではなくパート（Ⅰ）、（Ⅱ）展の内容を充実、補完する作品の数々である。特徴的なものを挙げると、17世紀前半の水指や香合といった茶道具や、かつて古九谷と呼ばれた有田の初期色絵磁器などで、総計 323件 627点が展示された。会期中、6月6日には表千家流友田宗映社中の協力により記念茶会が催され、来館者は柴田コレクションを鑑賞するとともにお茶を楽しみました。

また展覧会に先立って、平成4年から工事を進めていました柴田コレクション常設展示室が、4月29日にオープンし、パート（Ⅰ）、（Ⅱ）展の作品の中から30の項目別に 748件1781点が展示され、パート（Ⅲ）展と共ども入館者の高い関心を引き、熱心に作品に見入っていました。

また今回は30周年記念展ということで、第1回から29回展までの三千数百点におよぶ出展作品の中から、21機関46点を選抜し、併設して展示され、関係者のみならず一般の方々にも高い関心を引きました。



展示風景

新収蔵品展

平成5年9月4日から12日まで、第1展示室において新収蔵品展が開催されました。

平成4年度に当館で購入および寄贈をうけた資料を公開・展示するもので、今回は、購入・寄贈資料 345件のうち、柴田夫妻コレクション寄贈資料 323件を除く22件36点が展示されました。18世紀前半に有田で作られヨーロッパに輸出された絢爛豪華な色絵桜樹群馬文蓋付壺・広口瓶（5点組）や、幕末に長崎の飽浦で焼かれた秋ノ浦焼・色絵鷹猿文皿など貴重な資料も多く、訪れた方々は熱心に作品に見入っていました。



開会式のテープカット

30周年記念

陶&くらしの デザイン展 '93

平成5年8月7日から15日まで、第1展示室において、陶&くらしのデザイン展 '93が開催されました。

陶磁器に関する試験・開発研究を行っている全国の公設試験研究機関による試作品展で、食器やキッチン・食卓全品を中心に、照明器具などのインテリア、エクステリア用品等18機関83点が展示されました。



展示風景

シリーズ

やきものにみる文様 (25)

うずら
鶉 文 様

鶉は秋に渡来し、平地の草原、稲田に群れをなして棲むキジ科の鳥である。草深い野の情景を連想させる鶉は万葉の時代から歌に詠まれ、「鶉鳴く」は「古りにし里」にかかる枕詞となった。さらに秋という季節が鶉に伴うようになり、「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」藤原俊成（『千載集』巻四秋上 二五八）の歌に詠まれるような荒涼とした秋の野辺のイメージが鶉に定着する。鶉図が画題として現れるのは宋元画の影響以降である。とりわけ、日本に請来され東山御物となった伝李安忠（1119—62頃）の宮廷画院に活躍）筆の〈鶉図〉（国宝 根津美術館蔵）は有名であり、こうした中国院体花鳥画を学んだ土佐派の画題として鶉はしばしばとりあげられた。鶉に秋の野を連想することは既に定着していたことから、鶉は秋の風物（薄、菊、粟、麦、月、秋草など）と共に描かれ、なかでも実りの穂を垂れた粟と鶉はもっとも好まれた組み合わせであった。やきものの文様としては「粟鶉」文が、古九谷様式、柿右衛門様式の優品に見られる。柿右衛門様式の色絵粟鶉文様が、マイセン、シャンティ、ボウ、などのヨーロッパの窯でコピーされたことは広く知られるところであるが、古伊万里の文様に登場する鶉は「粟鶉」だけではない。「菊に鶉」、「秋草に鶉」などの定番の組み合わせのほか、「杉菜に鶉」、「棕櫚に鶉」などがある。写真の「杉菜に鶉」文は鶉が秋の季節をもつものであることを無視し、春の風物である土筆と杉菜に鶉を組み合わせた文様である。

（永渕友子）



染付鶉杉菜文皿

有田 1680~90年代 館蔵(柴田夫妻コレクション)

シリーズ

やきものの技法 (25)

すかし
透 彫 り

細い小刀などを用いて器胎に文様を彫り透かすこと。生乾きの時に素地の一部を切り取りさまざまな文様を作る。器胎に穴を開けるため内部が見え、やきものが軽快な感じとなる。しかし構造的には弱くなり、焼成や出来上がってからの取り扱い時に破損しやすい。文様を彫るときも切り過ぎて隣の文様を壊したりすることがある。

やきものに穴を開ける程度のことは早くから行われてきたが、複雑で装飾的な透彫りは17世紀以降に盛んになる。たとえば17世紀初頭の備前焼には透彫りの釣燈籠や重箱がある。九州のやきものでは17世紀前半の有田焼にすでに透彫りの技法が用いられている。17世紀後半には繊細なものが作られるようになるが、京都の古清水にも優れた作品があり、17世紀末から18世紀にかけて透彫りが流行したようである。19世紀にも亀山焼や三川内焼に透彫りの技法が見られる。



色絵菊牡丹文輪繫台鉢 有田 1680~1700年代

透彫りがなされる器種は香炉、釣燈籠、菓子鉢、食籠、重箱などが多い。香炉は共蓋の場合は必然的に透彫りの技法が用いられる。燈籠は光によって透かしの文様が強調される。菓子鉢は縁に透彫りの装飾が施され、全体が豪華な感じとなる。食籠や重箱は中の食べ物が見え隠れする楽しさがある。

透彫りの文様は、切り取った部分が図となる場合と、地を切り取って残った部分が文様となる場合がある。香炉の蓋の丁子文や桜花文は前者にあたり、重箱の網目文や七宝繫文は後者にあたる。このほうが切り取る部分が多く、線の状態で残るため彫りにくいし、構造的にも弱い。

（鈴田由紀夫）

行事スナップ

第23・第24期陶芸教室

一般の方々が陶芸の基礎を学び、もの作りの楽しさを知ってもらう陶芸教室も今年で12年目、第23期、第24期を数えるに至りました。これまでに修了した方は約500名を越え、すっかり定着してきた感があります。しかし、毎年のことながら応募者の中から抽選で20名の受講者を決める時は心痛むものがあります。

今年は第23期が6月5日から8月7日まで、第24期が8月21日から10月23日までの毎週土曜日、各々10回に渡って行われました。講師は第23期が大宅利秋先生、第24期が橋口誠先生で、受講者は第23期が21名、第24期が18名でした。それぞれ手びねり、ひも作り、板作り、ロクロ成形と進み、さらに釉掛け、焼成といった焼物作りの各段階をひとつひとつ学び、修了式には各々が創作、工夫して作った作品を目の前にし、焼物談議に花を咲かせていました。



第23期の皆さん

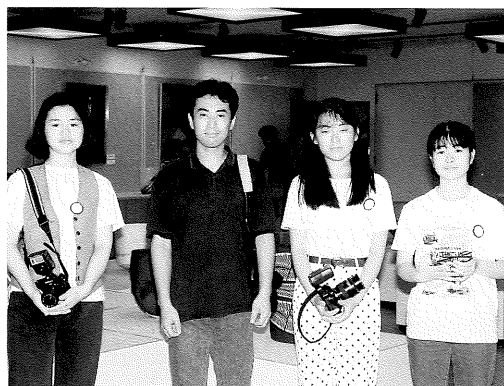


第24期の皆さん

博物館実習

平成5年度の博物館実習は7月19日から8月6日までの3週間に渡って行われました。実習生は専修大学の柳沼典子さん、佐賀大学の増田京子さん、鶴崎真理子さん、中里裕一郎さんの4名です。駒沢大学の広瀬正孝さんも受講予定でしたが、直前のケガで参加できませんでした。

実習では“館の概要と施設見学”に始まり、“陶磁概論”などの講義とともに“展覧会が開かれるまで”や“展示の方法”、“視聴覚教育教材の操作法”など実践に則した実習等が行われ、全員はじめてのことにとまどうことが多かったようですが、最後の週あたりになると、ある程度、余裕が出てきたようです。“陶片資料の整理”では小さな陶片に注記をするのに手間どっていましたが、“窯跡の見学”では、江戸時代の陶磁器の焼成が実感できたようで、長くて短かった3週間の実習を無事終了しました。



実習生の皆さん。左から柳沼さん、中里さん、鶴崎さん、増田さん。

利用案内

- | | |
|------------|--|
| 開 館 | 午前9時～午後4時30分 月曜休館
年末年始(12月28日～1月4日)休館 |
| 観覧料 | 一般200円(150円)／大学生150円(100円)
小・中・高校生は無料。
()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。 |
| 交 通 | 佐世保線有田駅下車徒歩10分 |